過去の名盤、モダンな新盤、どっちが凄いか我ら

現代名盤鑑定団 199

THE Private Detective

今月のテーマ曲

ショスタコーヴィチ：交響曲第7番《レニングラード》

千両役者の本領発揮。井上入魂の《レニングラード》

[ディスク詳細]
ショスタコーヴィチ：交響曲第7番ハ長調Op.60《レニングラード》
井上道義指揮大阪po
〈録音：2015年11月〉
[EXTON ⓓOVCL00586]

浅里公三
Kozo ASARI

マーラーとの関連性を感じる井上らしい《レニングラード》
大阪フィルの精度も驚異的

小林利之
Toshiyuki KOBAYASHI

ソロもアンサンブルも抜群
誰が聴いても、この曲の本質が掴める

（ゲスト）
増田良介
Ryosuke MASUDA

「ケレン」に躊躇なし
知的な把握と構成力にも優れる
ありそうでなかった演奏

新鮮無類、井上／大阪フィル！作品の本質にせまる会心の名演

小林 今月は、本誌5月号の月評で特選盤に推奨された**井上道義指揮大阪フィルハーモニー交響楽団**による**ショスタコーヴィチの交響曲第7番ハ長調作品60《レニングラード》**をテーマ・ディスクとして取り上げます。このディスクの録音は、2015年11月27日と28日に大阪のフェスティバル・ホールで行なわれた演奏会でのライヴ収録で、エクストンの江崎友淑が録音エンジニアをつとめ、ショスタコーヴィチの15曲の交響曲の中でも最大規模の楽器編成で知られる作品を、ほぼ完璧に再現したと言える名録音盤です。第7番はある時期まで作品としての評価に政治的社会的な要素が付きまとって、曲の理解にも及んでいたのは有名ですね。

浅里 第7番から第9番が「戦争交響曲」と呼ばれていた記事を読んだこともあります。

小林 バルトークがこの曲を聴いて自作の《管弦楽のための協奏曲》で音楽的に嘲笑したのもそのひとつですが、1941年7月のある日、突如フィンランド経由で攻め込んで来たナチス・ドイツ軍の電撃作戦で、レニングラードの防空監視員の制服にヘルメット帽のショスタコーヴィチが、「今日も敵との激しい戦闘が続いているレニングラードで、私は新しい交響曲のスコアを書いています！」と語る姿が世界に配信されて、アメリカでは『タイム』誌の表紙を飾ったこと。作曲中、この曲の各楽章に「戦争」「回想」「祖国の大地」「勝利」という副題が付けられていたことが伝えられて、この曲を戦争とスターリン体制を賛美した作品と軽視する風潮がありました。

浅里 ディスコグラフィを作っていても、最近は近年の録音が少ないこともありますが、国内発売を見る限り、昔の録音がこんなに少なかったのかと驚きました。それが79年秋に出版されたソロモン・ヴォルコフの『ショスタコーヴィチの証言』で従来の定説が逆転。第7番は真実の名曲と見られるようになります。後日その証言は、ヴォルコフによる偽作だったことが判明しますが、それまではショスタコーヴィチに特別な思い入れがある人以外はあまり評価していなかった時期がありましたね。それだけに、今回の井上道義／大阪フィル盤、この作品がこんなに素晴らしい曲だったのかと驚く方も多いのではないかと思います。

小林 井上道義は、かねてからショスタコーヴィチの交響曲演奏に傾注して知る人ぞ知る実績を挙げて来ましたが、2014年4月、大阪フィ

【ショスタコーヴィチ：交響曲第7番ハ長調Op.60《レニングラード》主要録音盤データ】

●**1942年**　ストコフスキー／NBCso　[Pearl:GEMMCDS 9044 [2CD] (1994/1)

●**1942年**　トスカニーニ／NBCso　[R　BVCC9725，蔵 OPK7050]

●**1946年**　チェリビダッケ／BPO　[Berliner Philharmoniker231884]

●**1950年以前**　スタインバーグ／バッファロー po　[Allegro　ALG3041]

●**1953年**　ムラヴィンスキー／レニングラードpo　[新　BVCX4017]

●**1957年**　アンチェル／チェコpo　[Sup　COCQ84480]

●**1962年**　バーンスタイン①／NYP　[SC　SRCR9929～30]

●**1968年**　スヴェトラーノフ①／ソ連国立so　[Me　VIC 5002～3]

●**1974年**　ノイマン／チェコpo　[Sup　COCQ84043～4]

●**1974年**　ベルグルンド／ボーンマスso　[Ser　TOCE 8910]

●**1975年**　コンドラシン／モスクワpo　[Me　BVCX37019]

●**1979年**　ハイティンク／LPO　[Dec　UCCD4333]

●**1984年**　ロジェストヴェンスキー／ソヴィエト国立文化省 so　[Me　VDC5034～5]

●**1988年**　ヤンソンス①／レニングラードpo　[WC　WPCS23150]

●**1988年**　バーンスタイン②／CSO　[G　UCCG90586～7]

●**1988年**　ナヌット／リュブリアナso　[Stradvari　PCCL 00064]

●**1988年**　ヤルヴィ／スコティシュ・ナショナルo　[Chandos　NSC48]

●**1989年**　ロストロポーヴィチ／ナショナルso　[E　WPCS21105]

●**1991年**　インバル／VSO　[De　COCO80123～4]

●**1991年**　バルシャイ／ユンゲ・ドイチュ po＆モスクワpo 団員　[BIS　BIS515]

●**1992年**　バルシャイ／ケルン放送so　[Brilliant　BRL 6324 (11枚組)]

●**1995年**　スヴェトラーノフ②／ハーグ・レジデンティ o [PC　PCCL00576]

●**1995年**　テミルカーノフ／サンクト・ペテルブルクpo　[R BVCC38209～10]

●**1995年**　アシュケナージ／サンクト・ペテルブルクpo [Dec　POCL1751]

●**1995年**　フェドセーエフ／モスクワ放送so　[EXTON OVCL00169]

●**1998年**　マズア／NYP　[T　WPCS10557]

●**2000年**　カエターニ／ミラノ・ジュゼッペ・ヴェルディ so [Arts (TB) TBLS0002 (10枚組)]

●**2001年**　ゲルギエフ①／マリインスキー劇場o＆ロッテルダムpo　[Dec　(TR) PROC1770]

●**2003年**　ビシュコフ／ケルンWDRso　[Avi (TMP)　MAV 0020]

●**2003年**　D.ヤブロンスキー／ロシアpo　[Naxos　8.557256]

●**2004年**　大植英次／大阪po　[Fon　FOCD9255]

●**2006年**　ヤンソンス②／RCO　[RCO Live　KKC5287]

●**2011年**　タバコフ／ブルガリア国立放送so　[GEGA NEW (TB)　GD382]

●**2011年**　ネルソンス／バーミンガム市so　[Orf (KI) KKC 5300]

●**2012年**　ゲルギエフ②／マリインスキー劇場o　[マリインスキー　KKC5373]

●**2012年**　ワシリー・ペトレンコ指揮ロイヤル・リヴァプールpo　[Naxos　8573057]

●**2014年**　P.ヤルヴィ／ロシア・ナショナルo　[ペンタトーン(KI)　KKC5473]

●**2015年**　井上道義／大阪po　[EXTON　OVCL00586]

ルの首席指揮者に就任して、昨年発売の第4番の凄味を帯びた快演に続く今回の第7番は、井上／ショスタコーヴィチ交響曲シリーズの録音継続を期待させるもの。そんな中、今回の鑑定団には、このライヴ盤の演奏を現地でお聴きの増田良介さんにゲスト参加をお願いしました。

増田　私が井上道義の《レニングラード》を聴くのは実は2回目。ライナー・ノーツにも書きましたが最初は30年前に彼が京都市交響楽団の定期公演で振った演奏を聴いたんです。その時も本当に素晴らしいと思いましたが、今回の大阪フィルの演奏を聴いてやはり30年前の京響と今の大阪フィルでは全くレベルが違います。井上道義はマーラーを振るときもそうですが思い入れの強い表現でありながら知的な把握と構成力に優れた指揮ぶりで、非常に感動させる演奏と聴きましたし、CDのライナー・ノーツも、感激して書きました。

彼のショスタコーヴィチの特徴は、私は「ケレンをためらわない」ところだと思います。ショスタコーヴィチの音楽は、私は「聴く人を煽る音楽」だと思います。昔はそこが嫌われていたところでもあったように思うのですが、井上道義は、そこをきっぱりと、ためらわずにやる。速くするところは速く、大きな音を出すところは大きな音で。簡単なようで、今までは意外とこれをきちんとやってくれない指揮者が多かった。井上道義らしいショーマン・シップと言っていいのかもしれませんが、この録音ではそれが見事に生きています。

浅里　私も大変感心しました。既発売の第4番の演奏もよかったのですが、この第7番は別な良さがあって素晴らしい。録音の優秀さもあり、大阪フィルの演奏技術の高さや、本当に緻密に棒についていく質の高さに感心しました。それから、この演奏には、ショスタコーヴィチとマーラーの関連性、共通項を、聴いていて強く感じます。バーンスタインの表現とはまた出方が違いますが、非常に説得力の強い演奏ですね。

トスカニーニ、ストコフスキー そしてチェリビダッケらの録音

小林　ショスタコーヴィチの作曲完成が41年の12月27日。当時ソ連政府がモスクワから疎開していたクイビシェフでのこと、同市での世界初演はサモスードの指揮で42年3月5日ですから、**トスカニーニ／NBC**響のアメリカ放送初演の録音が**42年**7月19日(オーバス蔵　OPK7050)というのは、対独戦争の真最中だった時代だけに凄いことですね。この曲のアメリカ初演の権利獲得をNBCに勧めたのはストコフスキーだったそうですが、ショスタコーヴィチ自筆の252ページからなる総譜と、合計2500ページというオーケストラのパート譜をマイクロ・フィルムに収めて、外交機密文書扱いでアメリカに空輸したのはソ連政府による文化政策のお蔭でした(笑)。ニューヨークのNBCにフィルムが届いたのは42年6月1日。フィルムからそれぞれ10部の演奏用の全スコアが完成したのが6月25日。トスカニーニが放送初演、ストコフスキーが演奏会初演ということで、それぞれ録音が残っています。

浅里　ただ、トスカニーニの録音は、本人のOKが出なかったのか、レコード会社が売れると思わなかったからか、発売されたのは67年のトスカニーニ没後10年を記念した「未発売録音アルバム」の中にシベリウスの第2番などと収録されてのもので、立派な演奏でしたが、音が少々残念といわれてました。ただ最近、同じ演奏の別録音と思われる復刻盤がオーパス蔵から出ていて、やはりトスカニーニの振る《レニングラード》は特別のものだと思います。

増田　そうでしたか。今回聴き直して、トスカニーニと**ストコフスキー**のNBC響との**42年**録音は、もし音が良かったら、今聴いてもかなり面白い演奏だと思いましたし。なかでも**チェリビダッケ／ベルリン・フィル**の**46年**録音は、第3楽章が非常に巨大な表現になっています。ストコフスキーは、ものすごいポルタメントをかけたり、ロマンティックな表現で、第1楽章や第4楽章といった間違えようのない楽章はかなり面白い。ただ肝心の音が、もうひとつ……。

浅里　実は私が初めてこの曲を聴いたのはチェリビダッケ／ベルリン・フィルの46年盤。50年以上前の学生時代に、このウラニア盤LPが三鷹だったか吉祥寺の名曲喫茶にあると友達が教えてくれて、聴きに行ったんです。ところが「あの曲は長いから」と全曲かけてくれない(笑)。第1楽章だけで当日は終わり。何回か通わないと全曲聴けません。

小林　当時の名曲喫茶、コーヒー代も大変だった(笑)。

浅里　46年12月のライヴというデータが正しいとすれば、多分この時がベルリン・フィルでの初演。第3楽章の遅いテンポなんて凄いですよ。

謎のムラヴィンスキー

小林　**ムラヴィンスキー**の指揮で聴くと、この曲の第1楽章、構成の長大さなど感じさせぬ、緊張と弛緩の、綾なす魅惑が潜んでいるのに驚かされますが、**53年**というモノーラル録音の弱点が、惜しい。

増田　ムラヴィンスキーは初演しなかった曲はほとんど演奏しない傾向がありました。7番もその一例かと。

浅里　第7番は、ムラヴィンスキー、42年7月9日にノヴォシヴィリスクでのレニングラード・フィル演奏会で指揮した記録がありますが、録音は53年でした。せめて60年代に録音してくれていたならと、

増田　残念ですね。この曲の初演は作曲完成時クイヴィシェフに居たサモスードが振ったわけですが、ムラヴィンスキーが疎開したのは、たしかノヴォシビルスクですからね。

バーンスタイン2つの表現

小林　私がこの曲の独特の魅力に惹かれるようになったのは、**バーンスタイン／ニューヨーク・フィルの62年**盤。明快かつ都会風の第7番でした。ただ**シカゴ**響を振った**88年**録音を聴きますと、この曲が語りかける劇的な起伏の凄みと清澄な情念の漂う美しさに、もう一つのショスタコーヴィチの魅力を発見する思いです。

浅里　私もこの曲が本当に聴けたのはバーンスタインの62年盤からだった気がしています。ただ、今聴くには、シカゴ響との88年盤の方がオーケストラもうまいし、録音もいい。バーンスタイン独特の感情移入も、より濃厚で、彼のショスタコーヴィチ、マーラー風と言ってもいいかもしれませんが、かなり粘る点、嫌う人がいるかもしれません。

増田　バーンスタインの62年盤は、すごく若々しくていい演奏ですが、一部にちょっとカットがあるのと、この方向の演奏だったら、後出のよりいい演奏が他にもあるように思うのです。一方、88年録音のシカゴ響盤は、非常に個性的な演奏で、特に第2楽章がものすごく遅かったりする、いわゆるバーンスタイン的な粘る演奏ですから、その意味で嫌う向きもあるでしょうが、やはり強烈な、すごい演奏だと思います。

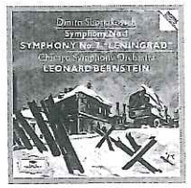
曲の未来を拓いたハイティンク

小林　70年代では、西欧で最初に交響曲全集を録音した**ハイティンク／ロンドン・フィルの79年録音**が要注目です。レニングラードとか戦争云々といったこととは全く無関係な、ショスタコーヴィチのスコアを、いかに密度高く、純音楽的にまとめて表現するかに徹した演奏で、とりわけ第3、第4楽章を大きなスケールのものにまとめています。ただ、ロンドン・フィルの響きが、ちょっと薄めなのが気になりますが。

増田　コンセルトヘボウ管だと、もっと良かったかもしれませんが。

浅里　ただこの時期にハイティンクが演奏して録音したことが、当時としては非常によかった。ショスタコーヴィチの死後、彼の作品に改めて目を向けるきっかけになりました。

画期的な「純音楽的アプローチ」でこの曲の未来を拓いた79年ハイティンク／ロンドン・フィル盤
[Dec　UCCD4333]



2つの録音が残るバーンスタイン。こちらの88年シカゴ響盤はより個性的で劇的な起伏の激しさが圧巻
[DG　UCCG90586～7]

チェリビダッケが46年にベルリン・フィルを振った録音も残る。ロマンティックで巨大な演奏は評価高し
[Berliner Philharmoniker　231884]

トスカニーニによる42年アメリカ放送初演の記録。しかし初発売は67年。さすがの風格を湛える貴重な記録
[RCA　BVCC9725]

増田　私もこのハイティンク盤、まさにこの録音をきっかけとしてショスタコーヴィチの第7番という作品が見直された、極めて画期的な演奏だったと思います。ただし、演奏自体がそれまでの演奏よりすごくハイレベルだとか、変わっているかというとそうでもなく、同時期に実はコンドラシン／モスクワ・フィルの75年録音のような素晴らしい演奏もあったんです。ただハイティンクのいいところは、非常に純音楽的なアプローチで、劇的だとか描写音楽的な面をあえて感じさせないようにしていること。その結果、この第7番という作品を、政治的な意味がなくても聴けることを知らせてくれる結果になったことです。この録音以前は「ショスタコーヴィチを褒めることは、ソ連を褒めること」とほとんど同義だった時代があったように思うんです。それがハイティンクの演奏が出たことで「たとえソ連が嫌いでも、作曲家ショスタコーヴィチを褒めることができるようになった」わけで、たとえ偽言であっても79年に発表されたヴォルコフの『証言』とハイティンクの全集録音は、そういう面が大きいと思います。

実力派のコンドラシン盤 隠れた魅力盤のナヌット

小林　さきほどお話に出た**75年録音のコンドラシン／モスクワ・フィル**盤、すごく精緻で彫りの深い美しさと、いかにもロシア風の暗い力感を秘めた演奏に感銘を受けました。

浅里　コンドラシン、この7番で全集を完結したのでしたが全集中でも一、二を争う立派な演奏でしょう。

増田　コンドラシン、素晴らしい全集録音です。ところで、私は**88年録音のナヌット／リュブリアナ**響による第7番の演奏も、すごく面白かったと思います。これは一部のマニアの間で、無名の指揮者の素晴らしい演奏として有名ですが、確かにオーケストラは非力ですが、演奏に熱い血が通っていて魅力的なんです。

ロストロポーヴィチの重厚で粘りのある表現

小林　ディスコグラフィを見ると、88年にかためてロシア／ソ連系の指揮者による録音が出ていますね。

増田　それは、ソ連がゴルバチョフの時代になりましたからね。

浅里　ソ連の演奏家たちが西側に出始めてきた時期とも近いですね。

増田　私は、80年代でよかったのは**ロストロポーヴィチ／ナショナル**響の**89年録音**です。彼の指揮は、正直褒めることになんとなく気恥ずかしさも感じますが（笑）、このエラートに録音したショスタコーヴィチの特に初期のものは本当にいいと思います。基本的には非常に重厚で粘っこい演奏だと思うのですが、第3楽章なんが特によかった。

2つの録音が残るヤンソンス。こちらはRCOとの06年録音。オケとの相性抜群で豊かさ滲みでるまさに正統
[RCO Live　KKC5287]

ロストロポーヴィチは89年にナショナル響と録音。独特の粘りが特徴だがこの第7番は全体に好バランス
[London　WPCS21105]

「マニアの間では有名」な88年録音のナヌット／リュブリアナ響の88年録音。作品への真摯さ伝わる逸品
[Stradvari　PCCL00064]

精密かつロシアらしい力感で聴かせるコンドラシン／モスクワ・フィルの75年盤。彼の全集中でも1、2の声も
[Melodiya　BVCX37019]

浅里　80年代では私は**ヤンソンス／レニングラード・フィルの88年録音**を選びたいですね。これも先程のゴルバチョフのペレストロイカのお蔭だと思いますが、一度ソ連から飛び出してオスロ・フィルを振っていたヤンソンスが、この曲については古巣のレニングラード・フィルを振っている点も注目です。ただ、ヤンソンスには、**06年にロイヤル・コンセルトヘボウ管**と録音、基本的には変わりのない表現ですが、音の点で、06年盤が推薦されますね。それにしても増田さんのご指摘のように、80年代から90年代、ヤンソンス／レニングラード・フィルから、オケの名称は市の名前とともにサンクト・ペテルブルク・フィルと変わりながら、テミルカーノフからアシュケナージが指揮者としてこの《レニングラード》を、レニングラードで、元のレニングラード・フィルの演奏で録音するなど、実に面白いですね。

増田　それらの中では、私はヤンソンス／ロイヤル・コンセルトヘボウ管の06年録音が、本当に素晴らしい演奏だと思います。全くケレンとかはあまりない演奏ですが、とても豊かな感じがします。

小林　ヤンソンスはEMI時代から、非常に正当的で音楽的にもまとまりのいい、信頼のおけるいい指揮者でしたが、ロイヤル・コンセルトヘボウ管との相性は格別のようですね。

作曲家直伝バルシャイの合同オケとの録音を聴く

小林　**91年録音のバルシャイ／ユンゲ・ドイチュ・フィルとモスクワ・フィルの**録音を面白く聴きました。バルシャイは曲のいろんな聴きどころに細かい表情をつけて聴かせます。第1楽章の変奏部などどの演奏とも違う表情をつけていて痛快（笑）。

浅里　ナチスのソ連侵攻50周年に行なわれた反戦記念演奏会のライヴですが、演奏は非常に引き締まった、いい演奏だと思います。

増田　オーケストラが若いことがメリットとして出ていますね。バルシャイは、70年代に西側に出たのですが、ずっとパッとしなかった印象ですが、ユンゲ・ドイチュとのこの録音で復活したように思います。**ケルン放送響**との**92年録音**よりも、こちらの方が集中力が高いですね。

ライヴでの緩急自在ぶりが記録されたゲルギエフ

小林　**01年録音のゲルギエフ／マリインスキー劇場管**とロッテルダム・フィルの合同演奏、私は結構楽しみましたが、12年録音では？

増田　私は、生でN響とマリインスキー劇場管の合同演奏、それから**12年録音のマリインスキー劇場管**の自主制作盤も聴きくらべましたが、ゲルギエフ、毎回違った解釈。非常にくせの強い違った表現をする人だと思います。今回の01年盤では、最後をものすごく遅く演奏して、巨大なフィナーレを作っています。ところが12年録音では、割とそこはあっさり。そしてその代わり第2楽章の中間部の直前、最初の主題がピッツィカートで出てくるところ、ゲルギエフはすごく遅く演奏します。もう、聴こえないかなと思ったときに次が来るといった演出を、両方で行なっています。結局ゲルギエフ、オーケストラや会場によって解釈を変える人だなと思います。それに12年録音のオケの自主制作盤は、オケのミスを修正せず、ミスのある演奏をそのまま発売するなど、演奏としての完成度にもう少し頑張って欲しいですね。ただ個人的には、この自由さを私は好きなんです。

浅里　ゲルギエフはちょっとドラマティック過ぎるかな。でも01年盤はすごくいい演奏だと思います。

ネルソンス、ペトレンコら新世代指揮者たち

増田　2000年代になって、またいい演奏が出てきたなと思ったのが、先ほども話に出た06年のヤンソンス／ロイヤル・コンセルトヘボウ管と、**11年のネルソンス／バーミンガム市**響盤。私はネルソンス盤、非常に素晴らしいと思います。とりたてて大げさな表現ではありませんが、細部まできめ細かく配慮が行き届いていて、劇的です。最近のネルソンスの演奏の特徴がとてもよく出ていると思います。他には、**ペトレンコ／ロイヤル・リヴァプール・フィル**がこの曲を**12年**に録音していますが、細かいところまできっちりやっていて、ネルソンスよりはちょっとケレンがあるという印象です。でもとても面白い演奏です。ロイヤル・リヴァプール・フィルは以前はともかく今はすごくうまくなっていて驚きました。

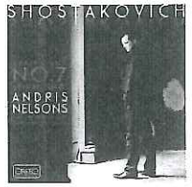
浅里　若い指揮者たちは、ショスタコーヴィチ作品との距離感が昔の指揮者たちとは違うと思われますか？

増田　ヤンソンス、ネルソンス、そしてワシリー・ペトレンコに共通するのは、旧ソ連圏の出身ということですが、ショスタコーヴィチを直接知らない、ショスタコーヴィチが亡くなってから生まれた世代。その前の世代は、ショスタコーヴィチの周りにいた人がいっぱいいた時代で、無意識に縛られてしまうことはあったかもしれませんが、彼らはおしなべてすごく自由で、溌剌として、やりたいように演奏していると思います。それが素直にいいほうに出ていると思います。

浅里　私も今回改めて聴いて、ネルソンスはハイティンクにちょっと似ているかなと思いました。でも、ネルソンスの方が説得力が強いですね。オーケストラもうまいし、音もいい。ネルソンス盤はよかったですね。

　増田さんがおっしゃるように、今の時代の若い指揮者たちは、作品との距離感がすごく自由にとれるようになっているから、何にもとらわれないで作品と向き合えるのでしょうね。殊にショスタコーヴィチを演奏する指揮者は、今もロシア周辺の人が多い。ネルソンス、ヤンソンス、ヤルヴィ、それぞれショスタコーヴィチ、あるいはソ連に対する感情が吹っ切れている感じがします。

近年評価を高めるワシリー・ペトレンコ／ロイヤル・リヴァプール・フィル。精密で現代的な12年録音
[Naxos　8573057]



ショスタコーヴィチ演奏の次世代を担うネルソンス。11年バーミンガム市響との録音は緻密かつ劇的な名演
[Orf (KI)　KKC5300]

「毎回違う」ゲルギエフ。12年のマリインスキー劇場管盤は少々粗い作りながら自由な"らしさ"伝わる
[マリインスキー　KKC5373]

バルシャイはケルン放送響盤ではなく91年のユンゲ・ドイチュ＆モスクワ・フィル盤を。これぞ直伝の威力
[BIS　BIS515]

戦時のレニングラード初演と20年後に残った15人の演奏家

増田　他に、ちょっと珍しいディスクの話を。**カール・エリアスベルク**という指揮者は、1942年、レニングラードがナチスに包囲されているときに、このショスタコーヴィチの第7番をこの地で演奏している人。レニングラード初演をした人なんです。有名なエピソードとして、ナチスを一斉砲撃で黙らせ、前線からオーケストラの団員を集めて、みんな飢え死にしそうなところで演奏して、それをスピーカーで前線のナチスに「お前らどうだ」と聴かせたという話があります。これは戦時中包囲されていた時代の話。そしてこの話には後日談があって、その20年後、その時のオーケストラのメンバーを集め、またエリアスベルクを呼んで演奏した録音があるのですが、その時生き残っていたのはたった15人。ドキュメンタリーとしても、非常に感動的な演奏で、ノーザン・フラワーズというところから出ています。この曲のイベント性を象徴する録音として重要で面白い。

まとめ

小林　今回の井上道義／大阪フィルの演奏、後世に残すべき演奏でしょうね。どんな人が聴いてもこの曲の本質を掴める立派な演奏だと思いました。今日はこれで終わります。